特別支援学校（知的障がい）における
子どものモチベーションを高める授業づくり

学 籍 番 号　229505
氏　　名　平 岡 柊 子
主指導教員　平賀健太郎
副指導教員　岩 﨑　弘

１．本研究の背景と目的

子どもが最大限の力を発揮し、主体的に活動するためには、教師が授業で構造化された環境を用意し、子どもたちが見通しを持てるようにすることが重要となる。スモールステップを活用したり、同じ活動に繰り返し取り組めるように工夫を行うことで、子どもが活動に集中できるようになり、学習が効果的なものになることが期待される。本研究では、特別支援学校（知的障がい）において、どのような授業が子どもの学習に対するモチベーションを高めているのかを明らかにし、より良い授業づくりを考え、その効果を検証することを目的する。

２．方法

特別支援学校（知的障害）の小学部の 5,6 年生の複学級に在籍する児童を対象に授業実践を行なった。授業実践は、2 年間にわたって 4 つの時期で行われた。今後の授業に活用できるポイントを提示することを狙いとして、それぞれの場面ごとにモチベーションを高めるために効果的な工夫を抽出した。

３．各回の授業における結果・考察

第 1 期：【授業内容】題材は「ちぎり絵で海の中を作ろう」であった。本授業での児童のモチベーションを高める工夫は以下の通りである。「絵や写真で魚を観察し、鱗があることに気づくことができる」「様々な紙を指で小さくちぎり、自分なりの思いをもって画用紙に貼りつけることができる」「海の音を聴きながらリラックスして自分の作業に取り組める」に焦点を当てて活動を設定した。その理由は、リラックスして過ごせるようになることが学級としての課題の一つであったためである。【結果・考察】絵本の読み聞かせでは 1 回目よりも 2 回目の方が絵本に目を向けている様子が多くみられた。展開を知っていたため授業に参加するモチベーションが高まりやすかったと考えられる。児童の実態把握に努め、適切で適度な構造化を行い不必要な支援は行わないようにすることで、児童が自分の力を発揮しながら活動することができ、それがモチベーションの高まりにつながったことが推測された。
第 2 期：【授業内容】題材は「電話で伝え合おう」であった。全 3 回を通して「伝言ゲー

ム」と伝えられた課題を児童が遂行する「ミッションゲーム」との２つの活動に繰り返し取り組んだ。繰り返しの回数を最大限確保するために、デモンストレーションも児童を巻き込んで行った。また単調な繰り返しに留まらず繰り返していく中でスモールステップを踏み、児童の活動の幅が広がり個々に合わせて難易度が上がるよう調整した。3 回目の授業では実際に電話をかける活動を設定した。【結果・考察】児童がリラックスすることで集中しやすくなることに注目し、第 2 期では効果的に構造化を用いながら授業の構成を工夫するという計画を立てた。第 1 期で読み聞かせを行った際、一度経験した活動の方が集中する様子が見られたことから、第 2 期では繰り返しの活動を意図的に設定した。活動を繰り返して経験したことにより、児童は見通しを持って活動しやすくなった様子がうかがわれた。長期間にわたって同じ活動を繰り返すことの有用性が示唆された。

第 3 期：【授業内容】題材は「お買い物をしよう」であった。児童の実態を踏まえ、買い物をする場面で生ずるお会計時の店員とのやり取りに焦点を当てて活動を設定した。買い物に関する写真やイラストと使用する貨幣の確認をしてから、店員役の教師と付き添い役の教師を配置し買い物をする一連の活動を 2 巡目まで行った。モチベーションを高める工夫として写真や貨幣を発問や提示する距離を工夫した。買い物活動は児童の実態を踏まえスモールステップになるように構造化による環境作りを行った。【結果・考察】会計中の児童は付き添い役の教員による言葉掛けに応じて行動しており、特に 1 巡目は主体的に客としての行動をとる明らかな様子は少なかった。しかし店員から渡されたレシートを児童自ら財布に入れる様子も見られた。買い物に不慣れな様子も多く見られたが、買い物の活動までのモチベーションを高める工夫を施した学習により、客であるという意識をもちながら買い物の活動ができる様子も認められた。

第 4 期：【授業内容】題材は引き続き「お買い物をしよう」であった。第 3 期での授業実践で行ったことを第 4 期でも繰り返して行った。また買い物活動では会計の順番を列で待つという要素を追加し、スモールステップになるよう工夫して学習内容を発展させた。【結果・考察】買い物活動では、第 3 期での授業実践時と比べ、児童らが会計中にレジから離れようとする場面が減少した。会計の一連の流れが見通しやすくなったことが要因として考えられる。発問に対しては全体に投げかけた場合よりも個別に問いかけた場合の方が応答が返ってきた。個別に関わることにより授業に参加するモチベーションを高めることができることが示唆された。

４．総合的考察

4 期にわたる継続的な授業実践の中で、知的障がいのある児童のモチベーションを高める授業作りの工夫として、以下の 3 点が重要であることを指摘した。1 点目は同じ展開の学習に繰り返し取り組めるようにすることで活動の見通しが持ちやすくなり、児童が安心して授業に参加できるということである。2 点目は構造化による環境の整備や、スモールステップによるノンバーバルな説明を行うことで児童が主体的に活動しやすくなるということである。3 点目は発問や資料の提示を行う場面で児童と教員との距離を近くしたり、1 対 1 で関わったりすることで児童が授業に参加しやすくなるということである。